

聾学校会津分校

PTA会長 山崎 まゆみ

東日本大震災では会津若松市は震度5強でした。中通り・浜通りから見れば被害が軽微だったため、今回のテーマにあたり参考になることがあるかどうか気がかりなところではありますが、少しでも情報を発信できればと思い、筆をとらせていただきました。

当日は、生徒達が下校した後に震災が起きました。当時小学3年だった息子は、学校から子どもクラブへ向かうファミリーサポートの方の車で地震を経験しました。聾学校や生徒に特に被害はありませんでしたが、学校は避難所になる可能性があるとのことで1週間休校となりました。

ライフラインの影響については、一部地域で停電・断水がありました。ガソリンや生活用品については、震災当初は買い溜めによる不足がありましたが、新潟からの流通ができ

ていたため、2週間程度で通常の日常生活を送ることができました。

息子は人工内耳を装着しており、充電して使用できるタイプと、空気亜鉛電池で使用できるタイプを持っています。普段は充電タイプを使用しているのですが、避難所生活を送った場合、優先的に電源を使用させてもらえるのか、が不安なところでした。空気亜鉛電池は、取扱いをしている店舗は限られており、地元で購入することもできません。インターネット購入しても、宅配便は営業所止まりで、震災当時なら貴重なガソリンを使用して取りに行くことを躊躇していたでしょう。当時はちょうど電池を購入したばかりだったので、困ることはありませんでしたが、今回の震災で電池の蓄えが必要であると改めて実感しました。学校は避難所として使用される可能性が高いので、学校にもある程度の蓄えがあるとありがたいです。

聾学校平分校

PTA副会長 鈴木 圭香

震災後二年半が過ぎましたが、あの時のことは今でもはっきり覚えています。

私はその時間に平分校へ迎えに行っていたので、すぐに息子と一緒にすることができました。しかし、当時平分校では、北は南相馬市、南は北茨城市から通っているお子さんたちもおり、南相馬市の方が我が子と会えたのは、その日の夜遅くなってからだったそうです。会えるまでは不安でいっぱいだったようですが、先生と連絡が取れたことで互いの安否が確認でき、ようやくホッとすることができたとのことでした。

このようなことから、子どもと親、そして学校との連絡手段の確保については、どんな災害でも備えておかなければならないと思いました。

私の息子は難聴の障がいがあり、話を聞き

取ることが難しく、理解するのに時間がかかります。そのため、大きな声による丁寧で分かりやすい説明を必要とします。しかしながら、一見なんの障がいもないように周りから見られてしまうことが多く、とても誤解されやすい障がいといえます。親と一緒にいる時は大丈夫ですが、将来大人になって一人で判断しなければならない時は必ずなってきます。だからこそ、震災のような緊急事態の時には、その時の状況を理解できる情報とサポートが必要になると考えます。

また、周りに求めるだけでなく、自分ができることを日頃からやっていく態度づくりも大切だと思います。その努力をしつつ、私自身も地域に協力し、息子を地域の中にとけ込ませ、地域に対して難聴の障がいがある息子を知ってもらうことから始めたいと思いました。

あぶくま養護学校

PTA会長 川島 育子

大きな揺れの後、帰宅して私が一番最初にしたこと。それは、自閉症の息子のサポートブックを手持ちのバッグに入れることでした。ここに我が子の特徴や薬に関する情報が入っている、支援が必要な時はこれを見よう、様々な物が散乱する家の中でスッと気持ちが落ち着き、子どもにも冷静に声かけができました。

3・11、毎日必要な息子の薬が残り数日分でした。震災直後は電話がつながりにくく、通院中の病院は遠方にあり様子が分かりません。通いの薬局は近く、週明け不安な気持ちで行くと幸い営業していました。が「処方箋がないと緊急措置で薬は数日分しか出せない」との返答。困り果てていると「今息子さんの薬の情報を持参してますか？〇〇病院が今日開いています。事情を話し処方箋をお願いし

てみて下さい。薬の在庫はあります。処方箋があればまとまった分量をお出しできます。」と教えてくれました。持っていたサポートブックを携えて病院に直行し、無事処方箋を手にすることができました。その場のタイミングに即対応できたのも備えのおかげ、と実感した出来事でした。他からの理解が難しい我が子の説明書を、病・薬歴とともに携帯できる形にしておくこと。大きな安心になります。

本校では、震災前の平成21年度から「サポートブック」作成学習会をPTA活動を通してすすめていました。震災後の平成23・24年度は、玄関先等誰もがすぐ気づく場所に備えられる「SOS緊急時お願いカード」の学習も加えて行いました。生徒の通学範囲が広域にわたる本校では、全体でのPTA活動の他に地域毎の保護者活動も行っております。防災には地元の情報が大切という意見をふまえ、現在は地域別活動で学習を行う方向で進めています。

あぶくま養護学校安積分校

PTA会長 山田 直美

3月11日の東日本大震災で、あぶくま養護学校安積分校は大きな被害を受けてしまい校舎を使用する事が出来なくなってしまいました。保護者も先生方も突然の事に困惑しておりました。当面の間、聾学校の校舎の一部を間借りして学校生活を行う事になりました。

障がいの違う子どもたちが同じ敷地内で生活をする事への不安。また、安積分校の子ども達は、こだわりが強いお子さんが多く環境の変化に対応出来るのかなど沢山の問題を抱えていました。

先生方は子どもたちの不安を少しでも軽減出来るようにと教室の配置を以前に近づけるように工夫して下さいました。保護者は子どもと聾学校の見学を行い写真やカードの提示で見通しを持たせていました。「子どもたちの負担を少しでも減らし今まで通りの生活をさ

せたい」と先生方も保護者も同じ気持ちだったと思います。保護者や先生方の不安をよそに子どもたちの元気な声が教室に響き渡りました。聾学校の皆様には2年間、大変お世話になりました。ありがとうございました。

今回の災害で沢山の経験をして多くの判断を強いられて来ました。私たちは、自然災害を未然に防ぐ事は出来ません。しかし、困難を乗り越える強さを持たなければなりません。今回、子ども達のたくましさ、地域の皆様の優しさ、先生方の的確な判断力、保護者の皆様の結束力を実感致しました。地域、学校、家庭の連携こそが困難を乗り越える強さだと思えます。子どもたちが安心・安全に過ごせる環境を維持させて行くのは私達大人の責任だと思えます。子どもたちの笑顔の為にこれからも頑張っていきたいと思えます。

須賀川養護学校医大分校保護者

私の子どもは、病気の症状から毎日体を洗い清潔に保たなければなりません。毎日ガーゼや包帯を使った処置も必要です。そのため、震災時は水道の復旧が遅く、大変な思いをしました。体拭きしかできなかったので皮膚の状態が悪化しました。こういった皮膚に障がいのある人が優先的に入れるお風呂・シャワーがあればいいと感じるくらいでした。また、店が閉まっていてガーゼや包帯が買えず、病院は入院患者用のストックのみでいつ入ってくるかもわからない状態・・・。薬が数日分しか残っていないが病院に行くにもガソリンを入手できない等、自宅が避難準備区域だったことと子どもの病気の状況とが重なり、困難なことが多くありました。私自身高熱を出してしまい、もうろうとしながら子どもの処置をしていました。こんな時病気を知ってい

るスタッフがケアをしてくれたらとても助かります。後で、病気治療や対応が心配で避難できずに、不安に思いながら家に籠っていた親さんの話も聞きました。みんな大変な思いで過ごしていたのがわかりました。

しかし、有難く、とても心強く感じたことがあります。一つ目は、飯舘の避難所で診察と薬の処方をしていると聞き、すがる思いで行った時のことです。迅速に対応してくださり、メンタル面でも一人一人丁寧にケアしてくれていたお医者さんに感動しました。

二つ目は、「患者とその家族会」の存在です。ガーゼと包帯の手配がつかなかった避難先の埼玉県に、「表皮水泡症友の会（デブラジャパン）」からガーゼと包帯を送っていただきました。どうしていいかわからない不安の中、本当に助かりました。苦しい状況で支えになってくれた会の存在は有難かったです。

須賀川養護学校郡山分校

P T A 柳沼 裕子・高橋 寿美

一つ目は、学校との連携の大切さについてです。私の場合、震災当日は、子どもが家にいたので学校に迎えに行くということはありませんでしたが、子どもが学校にいた場合、学校とどう連携をして対応するかがとても大切になってきます。障がいのある子どもは震災に対してとても敏感な子が多いと思うので、手助けが必要となります。もしかしたら、学校と連絡が取れなかったり、迎えに行くにも車では時間がかかったり、学校に泊まらなければならないなくなったりする場合も考えられます。学校だけで対応できない場合は、地域の方の支援も必要となると思います。

そこで、二つ目は日頃から地域とつながっていることの大切さを実感した点についてです。地域の行事や清掃になるべく親子で参加していたことで、挨拶や声かけをしてくださ

る方が増えただけでなく、一緒に作業を通して子どもの実情や困り感を知ってもらいきっかけにもなりました。震災時は、紙おむつや食料等を自主的に届けてくださり、地域で見守っていただいている安心感がありました。

三つ目は、親子ともに心にゆとりがある時挑戦していることが、非常時に思いがけず力を発揮するということを感じたことです。例えば、楽しく体力をつける、遊びのレポーターを増やして余暇を楽しく過ごせる、非常時には、こだわりが強くなりやすいので、におい、音、材質などは本人が折り合いのつけられる種類をゲーム感覚で増やすなど、楽しい思い出とセットになっていると災害時のりきる心強いアイテムになると思いました。

障がいの違いはあっても、日常生活の中から支援や連携のヒントを見つけ出し、非常時に自分に何ができるだろうか、これからも考えていきたいです。

西郷養護学校

PTA会長 渡辺 裕子

平成23年3月11日金曜日午後2時46分。未曾有の大災害が私達を襲いました。

息子を学校に送る途中、朝だというのに西の空にはオレンジと黒が混ざった様な雲が広がり、「気持ち悪い空だね。」と息子に語りかけたことをはっきりと覚えています。

災害時は幸いにも息子と二人で自宅に居たので、息子を連れて外に避難し怪我もなく、無事でした。

地震が収まってすぐに、誰とも繋がらなかった携帯電話が息子の担任の先生と繋がりました。真っ先に息子達の安否を気に掛けて下さったことに胸が熱くなりました。誰かと繋がることの安心感を知りました。

我が家は、破損はあったもののライフラインも何とか使え、自宅で生活することが出来ました。避難所へ行かれた方もいましたが、

自閉症の息子が居る我が家は、避難所へ促されたとしても行かなかったと思います。

原発事故が起こった時も自主避難を考えましたが、子ども達が不安定になることを考え「家族で一緒にいること」を選択しました。

西郷養護学校には重複障がいの子供生徒もおり、災害時の対応について多種多様な方法が必要です。そのような時に「サポートブック」は大切だと思います。福祉避難所の確保が望まれますが、避難所でできる配慮・工夫を考え伝えていくことも必要だと思います。

災害時には、普段からの備えが大切であり、そしてそれと同じ位に人と人との繋がりも大切なのではないのでしょうか。人を思いやり、困った時にはお互いに手を繋ぎ合うことを常に心に留めておきたいと思います。

これからも、私達はこの福島でお互いに助け合いながら生きていきます。今後このような災害が起こらないことを心から願います。

石川養護学校

PTA会長 渡邊 章

震災当日、私は営業途中の車の中でした。交差点の信号で止まった途端、強い揺れに襲われ、周りを見たら自動車屋のショールームの大きなガラスが、映画の1シーンのように次々と割れていき、ただならぬ光景を目の当たりにしました。たちまち道路は渋滞化し、他の交通機関も不通となり携帯電話もつながりにくくなりました。近くにいた上の娘と連絡を取り、仕事帰りに迎えに行くようにしました。地震直後のわずかな間に連絡がついたことはラッキーだったと思います。その後は連絡も取れず、他の家族や会社の状況は帰宅するまでわかりませんでした。私の場合、地震後に早めに連絡を取り合ったので早く確認出来ましたが、これが全く取れない状況だったら、娘を捜しに右往左往していたことでしょう。ライフラインが使えない状態で、仕事

中すぐに抜けられなかった方もいらしたと思います。学校にいる時間帯であれば、学校に迎えに行くことが出来ますが、学校を出てしまうとそれぞれ通学手段が違うので、普段通っている順路を把握していないと迎えに行っても行き違いになってしまうこともあると思います。このような場合の対応についてよく話し合わなければいけないと思いました。

学校が休校になり、会社を休まなければならなかった人もいたと思います。「緊急時に受け入れてくれる所があれば助かる。」と思いました。例えば、休校でも出勤している時間のみ学校を受け入れ場所にする等、緊急時の対応マニュアルがあれば、普段通っている所であり、設備も整っているのも無理なく子どもたちを受け入れることが出来ると思います。職員配置や場所の確保、助成等議論することはたくさんあるかと思いますが、自然災害はいつ起きるかわからないので、早めの対応が必要だと思います。

会津養護学校

PTA会長 高橋 仁美

2011年3月、私は県内では比較的被害の少なかった会津で、子どもを家に残し、災害対策本部で避難所運営スタッフ等の仕事をしていました。不便なこともあり心身ともに大変ではありましたが、幸い子どもの体調が安定しており、それまでの日常と大差ない日々を過ごしていたように思います。

避難所で仕事をしながら、「私が避難をしなければならなくなったら重心の子どもを連れてどこに避難すればいいのだろうか」と考えました。私が携わった避難所では、妊婦の方を寒い体育館ではなく別室で休んでいただいたり、高齢者等にはおにぎりをおかゆにして提供したりと配慮をしていました。そんな中、障害のある子どもたちはどこでどの様にして過ごしているのだろうか、この避難所で受入れることはできないだろうか、どのようにす

れば受入れは可能だろうかと思案したものの、その時の私には情報を集めたり、働きかけをしたりという行動に移すことはできませんでした。今でもそのことが心残りで、後悔しています。

私はこの震災を通して、「私たちは今こういう支援をしてほしいと声にすること」「日頃から、生活している地域や所属している組織の中でいつでも助け合える関係を築いておくこと」「PTAや親の会等の大きな組織が横の連携を密に繋がり情報を交換し、関係機関との速やかな協力体制がとれるよう動けること」が大切なことなのではないかと思いました。

今もなお大勢の子どもたちが不安な環境の中で生活している状況が一日でも早く改善されるよう、私にできること、単Pでできること、連Pだからできることを考えたいと思います。

会津養護学校竹田分校

PTA会長 大橋 千明

当時、息子は小学6年生で翌日に卒業式を控えていました。一つ下で重度重複障害の娘は、午睡中に震災が起こり、余震で落ち着かず、てんかん発作を立て続けに起こし、目が離せない状況でした。

買い物に行くとスーパーでは食料品や生活用品、水の争奪戦であつという間に物資不足になり、ガソリンスタンドの給油は10リットルしか入れてもらえず、長蛇の列の交通渋滞に驚くばかりでした。障がい児を連れての外出は厳しかったので、食事はある物で済ませ、ただただ家でじっとしているしかありませんでした。

次に困ったのは娘が服用している薬が無くなってしまったことです。医療機関が郡山療育センターだったため、行くことができず幼い頃通院していた竹田病院に行き、事情を説

明して1ヶ月分を何とか処方していただけました。この時痛感したのは、地域の病院との連携が必要で地域で生きていくために、地元のかかりつけの病院が必要不可欠だということです。

また、医療的ケアが必要なお子さんは処置できなかったら命にかかわる問題です。想像しただけでぞっとします。

幸い会津地区は被害も少なく、ライフラインも大丈夫でしたが、当たり前にも恵まれた生活のありがたさをしみじみ感じさせられました。

「備えよ！常に！」を教訓に窮地に立たされた時、地域理解、避難場所と医療機関の確保、そして障がい児を育てている親達だからこそ何かあった時「大丈夫？」とお互いに助け合える関係が大切です。また、未来に向かって活力ある福島になるよう各学校のPTAの方々と連携を深めていければと思います。

猪苗代養護学校

PTA会長 坂内三章

今回の大震災を受け、本校においては幸いにして被害も少なく、学校、福祉施設との連絡もうまく取れていたと感じます。

地域内でも、ライフライン等もほぼ被災を受けることも無く生活に支障をきたすこともあまり無かったと思います。

しかし、後の原発事故により、本校でもやむなく屋外活動の制限が行われ、子どもたちの教育活動にも多大なる影響を及ぼす事となりました。私たち保護者も今まで放射能など考えも想像もしていなかった事で戸惑いも多分にありました。子どもたちにとっては大好きな屋外活動ができず、今まで当たり前にしてきた事が意味も分からず制限され、大きなストレスであったことだろうと思います。活動自粛解除後の運動会での元気に屋外を走り回る姿は今でも感慨深く思い出されます。

会津地区は被災者を受け入れる側で、地域にも多くの避難所がありました。実際に目の当たりにはしませんでした。中には多くの障がい者の方々も居たと思います。本校にも富岡養護学校の児童が数名一時転校してきました。PTA活動で何かできたら良かったと今更ながらに思いますが、何もできなかったし、何をしていたのか分からなかったのが正直なところです。

本校は磐梯山の麓にあり、火災噴火の自然災害が想定されています。確率的にはありえない事かと思っておりましたが、実際にはいつ起こるか分からないと、今回の大地震、津波で改めて感じました。今回の大震災で、今後起こるかもしれない災害のために、多くのことを学ばなければならないと思いました。家族及び支援者そして地域の方々の連携を充実させ、行政の行き届かない所を補助しながら子ども達が安心して暮らせる街づくりをしていなければならないと思います。

いわき養護学校

PTA会長 千島 茂

個人的に感じたことではありますが、私の地域は新興住宅街であり、隣近所との関係が希薄です。子ども会が学校単位なので、障がいのある我が子は地域に入ることが出来ないのも理解も得られにくいと思います。

避難所へは行かずに遠方へ避難したので、避難所での事は聞いた話になります。当然の事ですが、健常者と一緒に、それも狭い所なのでいつも通りには行かず、大きな声を出したり、じっとしてられない為他の方々に迷惑になると思い避難所から出たということです。

最近インクルーシブ教育システムが国により推進されています。これから何年か先にこのシステムが浸透して、そういった教育を受けた子ども達が成人し社会へ出て、障がい者となんの分け隔てもなく生活出来るように

なるには、どれ位かかるのでしょうか？国で進めて行くなら、すでに社会に出ている人達への教育も必要になると思います。

街や公共交通機関でお年寄や体の不自由な人がいても、手助けをする事が殆ど見られない中で、どう理解させよう実践するのか不安になるばかりです。

耳にはイヤホン、手にはスマホ、こんなスタイルで周りがよく見えているとは思いません。スマホを使って情報を得ることが出来るかもしれませんが、情報を得られるのは自分だけで、他人を気づかう事は出来るのでしょうか？日頃から障がい者と行動する機会をつくっていかなければ、いざ災害が起きた時に、自分の事しか考えられなくなると思います。

大きな災害が何時、何処で起きるかわからない状況ですので、今年の流行語ですが、何かをするなら「今でしょ！」の気持ちで、出来る事はすぐ行動に移したいと思います。

相馬養護学校

PTA 竹村 友伸

私が震災を通じて感じたことは、日頃から支援や連携できる団体や組織とのつながりを幅広く持っていることの大切さです。

私の子どもは自閉症で、以前から自閉症協会に入会し、福島県や相双地区の自閉症協会会員の方々とのつながりを持っていたことが、震災で困った時の助けになりました。

震災・原発事故の直後は避難も出来ず、断水し食べ物もなく、被曝しないように家に閉じこもっていたわけですが、子どもはストレスがたまる一方でした。そんな時、福島県の自閉症協会事務局から福島県立医大の医療チームが障がい者の医療相談に相馬まで来てくれるとの連絡があり、親としては話を聞いてもらいアドバイスをいただき助かりました。また、自閉症協会を通して、迅速に支援物資を入手することが出来助かりました。

私の職場は震災1週間後から職場の復旧作業が始まり、4月8日からは相馬養護学校も再開しました。今まで利用していた児童デイサービスが放射線量の高い地域にあったため閉鎖となり困っていたところ、自閉症親の会でお世話になっていた菅野友美子さんが放課後支援の「ゆうゆうクラブ」を立ち上げてくれました。震災後の混乱の中でも子どもが落ち着いて過ごすことが出来ました。また、以前から参加していた相馬市の手をつなぐ親の会からも支援を受けることも出来助かりました。

そのような支援があった一方で、今まで何もつながりをもたなかった方々には、支援団体や組織に情報がないために支援したくとも迅速に支援できない状況があったと聞いてます。

福島養護学校

PTA会長 菱田 小夜子

私達は、今回の大震災という過酷な試練の中で多くのことを経験し考えさせられ、学ばなければなりません。

中でも、特に連携というものの大切さと重要性を大変痛感しました。

震災のような非日常的な事が起こった時に大切なものは何か？を改めて考えてみました。

物資の支援は最重要ではありますが、障がいを持つ子どもたちに最も必要なものはその子に合った精神的支援なのではないか、と思いました。精神的に安定しなければ、避難所にいることすら苦痛で困難になってしまいます。

私達大人でさえ、急に他人と日々生活を共にしなければならぬというのは、不安定なものです。まして、障がいのある子どもたちなら、本人の苦痛は、私達が想像するもの以上

なのではないでしょうか。

障がいをもつ子どもたちの障がい種は様々です。必要な支援というものも、それぞれ個々に違ってきます。だからこそ、連携というものが重要になってくるのではないのでしょうか？近所の人、友人や知人、そして行政の人という風に、色々な角度の人たちに、知ってもらい、理解をしていてもらう。普段から少しずつ、協力してもらい、いざという時に大きな支援の輪ができるように目指せば、障がいのある子どもにとっても、私達親にとっても不安が1つ減るのではないのでしょうか。

まだ、復興の途中ではありますが、今回の大震災を経験した親として、少しでも多くの障がいのある子どもたちが、この様な震災が起きてしまったときにきちんとした支援が受けられるように、努力していきたいと思いません。